
あの日、あの時、あの場所で、、、

__Last time

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日、あの時、あの場所で、、

【Nコード】

N4886W

【作者名】

l a s t t i m e

【あらすじ】

小さい頃からいつも一緒にいた6人の少年少女。ある事故がきっかけでみんながはなればなれに。そんなある日、ある出来事が起こった。

1 なんで（前書き）

久しぶりに長編小説を書こうかなと・・・
続くかはわかりませんが・・・w

1 なんで

なんであたしはいまここにいるの？

なんでここに帰ってきてしまったの？

なにか理由があるの？

どんな理由？

でも辛かった

もう昔には戻れないのになって思うと

胸が苦しくなった

あたしがなにか役に立つことはないのかな？

ああそうか、あたしのせいでバラバラになったんだ

あたしが、あの時・・・

みんなごめんね。

あたしは絶対にみんなを元に戻してみせるから

昔のあの頃みたいにみんなを笑顔にしてみせる

だからそれまで待つていてくれるかな

でも、あたしには限られた時間があるはずなんだ

それまでにみんなを笑顔にできるかな

2 今いる場所

あたしは『桜 瑞樹』

今あたしが生きていたら高校3年生になってるはずだった。

あたしはずっと空から見ていたけど・・・

あの事故以来みんなは全く口を聞かなくなっていた。

あたしたち6人はいつも一緒に

放課後も誰かの家に寄ってギヤーギヤー騒いでたのに――。

今は幻みたい・・・

あーあ、このままだったら見てられないよ

誰かの家にでも行こうかな、

その前にあたしの姿見えるかなあ？

ふいにあたしは信之の家に行ってみる事にした。

地面に足を付けてみた。ちゃんと足はあるのに生きていないんだよね・・・。

そう思うと悲しくなった。

通りかかる人はあたしの目の前に来たかと思うとあたしの体をすり抜けて行った。

あたしは道の端へ行った。

別に人に当たるわけではないけど・・・

やっぱり死んでるって実感しちゃう。

説明が遅れました。『中森 信之』はあたしの幼馴染の1人。
見た目はクールだけどいつもいつとも笑ってた。

今じゃ見た目のままクールなのかもしれない・・・。

そんな事を考えていると信之が目の前を通った。
あたしは後について行った。

信之はドアを開けるとあたしがいるにも関わらずにバタンツと閉めた。

うわっひどい・・・。やっぱり信之には見えないのか。
あたしは信之の家のドアをすり抜けた。

そのまま信之の部屋へと足を運んだ。幽霊だけど足はちゃんとあるんだから。

透けてるけど（苦笑）

信之の匂いがするな・・・懐かしい。

信之は台所に行ってコップ一杯、水を入れた。

そしてそのまま振り返った。あつ避けなきや、幽霊^よだけど・・・。
パツと見たらすっごいびくりした顔の信之がいた。

そして信之は水の入ったコップを落としてしまった。

ガシャーン。

コップが割れる音が響いた。

信之はあたしの方をずっと見て動かないまま。

しばらくの間沈黙が続いた。

「瑞樹・・・？瑞樹なのか？」

まさかとは思ったけど、あたしの姿が見えるんだ！
すっごいすっごい！

「あたしの事見えるの!？」
「ちよつとこつち来い!」

そう言つて信之はあたしの手をつかもうとした。
信之、つかめないよ。
だつてあたし幽霊だもん。

信之はあたしの手を普通につかんだ。
・・・あれ？

そのままあたしは信之の部屋へ連れて行かれた。

あたしはふと思つた。

何で信之はあたしの姿が見えるのか？

もし最初から見えてたとしたら・・・

あたしの姿が見えたにも関わらず

信之は見えないふりをしてドアを閉めたのか！

「なんで瑞樹がここにいる？なにしに来た？」

あたしも信之に聞きたいことがあるんだよ。

信之が答えてくれたらあたしもわかる範囲で答えるよ。

「あたしの姿が見えてたんなら何でドア閉めたの!」

「先に俺の質問に答えるよ!」

あ、あと信之にも一応お願いしておかないと迷惑だよね。

「信之・・・あのさ」

「んだよ、おれのことは無視かよ」

「質問は後でいっぱい答えてあげるからさ!」

「んで、なに？」

「あたし、、ここに住んでも・・・いい？」

そう、あたしは幽霊。

あたしは住む所なんてどこにもなかった。

家に帰るのもなんかいやだし・・・

信之以外にあたしの姿見えるかわからなかったから。

「無理。」キツパリ

「なんでなんでなんでなんでなんで！！」

「狭くなる」

「ここにしか住めるとこないの！（ないはず・・・）だからお願い
！」

1時間後――。

「ああ！わあったよ！だから俺の質問に答えろ」

まだ言ってるんのか

相変わらずだなあ。

「あたしはみんなの事が心配でここにきたの！以上！」

「てゆーかあたしの質問にも答えて！何でドア閉めたの！？」

あたしは今いれる場所を確保した。

3 懐かしい道

住む場所を手に入れた所で、瑞樹は自分のお腹の音に気付いた。

「・・・ねえ信之、お腹空いた、なんか買ってきて」

「お前幽霊だろ？」「幽霊でもお腹は空くんだよ！早く早く！」

と、なってあたしと信之はコンビニに向かった。

あたしは信之の後ろをついて行くのだが、すごく懐かしく感じた。風も匂いも風景もあたしが生きていた頃と変わらなかった。

犬を散歩している人もいれば

ランニングして汗をかきまくってる人もいる。

スーパーの袋の中に大量の野菜を入れて重そうに持っている人もいれば

カップルが顔を真っ赤にしながら手を繋いで歩いていたりもした。なにひとつ変わらないのにどこか寂しく感じた。

「なにそんなに見てんの？」

「いや、なんか寂しいっていうか・・・」「なんで」

「あたしがいなくなってもなにも変わらないんだなって」

瑞樹は悲しそうな顔をした。

そしたら、信之が瑞樹の髪をくしゃつとした。

「お前がいなくなつてどんなにみんなが悲しんだと思ってんだ？」

「たとえば？」「お前の家族はもちろん、クラスのほとんどが寂しかった」

「えーうつそだあ」「嘘ついてどうすんだよ」

「いや、でもまあ・・・なんかごめんね」

「なんで俺に謝るんだよ」

「あはは・・・所でみんなはどうしてんの？」

信之は黙り込んだ。

気が付くとコンビニに着いていた。

「食いたいもん適当に言えよ、お金有り余ってるから」

そう言うときポケットの中から財布を出して中身をチェックしていた。

あたしはさっきの質問にどうしても答えてほしかった。

だけど不器用に流されてどう聞いたらいいかわからなくなった。

ふと、信之の顔を見ると悲しそうな寂しそうな

でも何かを考えている顔をしていた。

4 理由

あれから信之はあたしと口を聞いてくれない。
コンビ二を出た後もずっと無言で歩いてた。

なんで答えてくれないの？信之。
なにかあったの？

「ねえ信之」「ん？」

「みんなはどうしてる？」

「・・・しらねーよ、あいつらと会ってねーし」

「え？どーして？」「そんなの他の奴に聞きゃいいだろ！」

信之はキレ気味で言った。

他の奴って言うても・・・

「ねえ信之、ちょっとくらい教えてよ」

「・・・。。。」

「無視!？」「・・・。」

信之は少し早歩きになった。

「・・・ねえってば」「うるせんだよ」

信之は瑞樹をギロリと睨んだ。

あたしはついに頭に血が昇った。

「なんであたしが切られなきゃいけないの!？」

「俺はほんとの事言っただけだろーが」

「じゃあ、なんでなにも答えてくれないの!」

「・・・思い出したくもないこと

なんでお前に言わなきゃいけないんだよ!」

「教えてくれなきゃあたし帰れないもん」

あたしはみんなを笑顔にするためにここへ来たのに。
理由もわからないんじゃないよ。

「・・・だからだよ」「え?」

「お前が死んだからだよ」

そう言っただけで信之はどこかへ行ってしまった。

あたし?あたしが死んだから?

なんで?意味わかんない・・・。

これじゃどうしようもできないじゃん。

瑞樹は座り込んだ。

5 真実

あーどうしよう、信之怒らせちゃった。

あの子が拗ねたらめんどくさいんだよな。

え、あたしのせいじゃないよね。

ちがうちがう！あたしのせいじゃない！・・・はず。

あたしは急に寂しくなった。

もし、あたしが生きていたらみんな笑ってたかな？

もし、あたしが生きていたらずっと一緒にいられたのかな？

そんな事を考えていると、ふと通り過ぎた人が懐かしい匂いで漂っていた。

外見は少し変わっていた。

やけに細くなっていたが、あの背中を間違えるはずはない。

あの背中は・・・

「あやね 彩音！！」

・・・やっぱりあたしの声は聞こえないのかな

信之は靈感があるんだ。へーすごい。

って、そんな事はどうでもいい！

信之以外の人も見つけたんだ。

後について行ってみよう。

『たけうち 竹内 あやね 彩音』

は小学校の頃、同じクラスになったのがきっかけ。

どこにでもいる様な普通の女の子だったけど

たまに寂しそうな顔をする子だった。

そして自ら自分の命を絶とうとした。
それをあたしが力づくで止めようとしたけど、一緒に落っこちちゃった。

それで彩音は全身打撲で済んだけど、あたしは頭を強く打って入院。そのまま意識が戻らず、死んでいった。

あたしは彩音のすぐ後ろをついていった。

よく見ると、彩音の髪は全くケアされていないのか髪が傷んでいた。彩音の家には行ったことがなかったので調度よかった。

玄関までついていったあたしは愕いた。

そこには「金返せ」だの「泥棒」だの様々な暴言が書かれた紙がドア一面に張り付けていた。

ドラマとかで見た事のある光景だった。

部屋の向こうから大きな物音がした。

部屋をすり抜けて行ってみると奥の方に声が聞こえた。

あたしはさらに奥へと進んでみた。すると・・・

「なんで何も持っていない！？さつさと食いもん盗んで来い！」

「お父さん、物を取るなんてあたしにはできないよ」

「口答えするな」ドカツ！ガシャン！パリーン。

「いっつ・・・！」

彩音がガラスへと吹っ飛ばされた。

幸い腕のかすり傷だけですんだ。

少しホッとした。

その時、彩音のお父さんらしき人が彩音に近づいた。

そして、彩音に殴り掛かった。

「お前さえいなけりやな、俺は母さんとやり直せたんだ！」

お前がいたから、母さんは俺さえも置いて行きやがった
全部お前のせいだ！お前なんか生まれて来なければよかったんだ！」

その時あたしの頭の中の何かが横切った。

6 思い

—— お前なんか生まれて来なければよかったんだ。

そつえばあかし、お母さん達の事覚えてない・・・？

ガンツ！ガシャンツ！

そつだ、今はこんな事考えてる場合じゃない。
彩音を助けないと！

ピリリリ、ピリリリ

部屋中に携帯の着信音が鳴り響いた。

彩音のお父さんのものだった。

彩音のお父さんは「チッ」と舌打ちをして家のドアを勢いよく閉め、どこかに出掛けてしまった。

はあ、なんとか助かった。

彩音はいつもこんな毎日を・・・？

「ごめんなさい、お母さんごめんなさい

あたしが悪い子だから、言う事聞かないから
出て行っちゃったんだよね・・・

お父さんもごめんなさい

だから・・・だから瑞樹も死んじゃったんだ」

彩音は大粒の涙を流してその場に座り込んだ。

そっか、彩音のたまに出す寂しさはこういう事だったのか。
ずっと悩んでたんだ。

いや、苦しかったんだ。

今までもずっと辛かったんだ。

なんで気付いてあげられなかったんだろう。

「・・・彩音」

「・・・」

やっぱりあたしの声は聞こえない・・・か。

信之の他に誰かいらないかな・・・靈感ある人（笑）

いまは信之とはやだなあ、また人探すのかあ？

適当に行けば見つかるかな？

よし、あいつのところに行ってみるか！

凶悪ヤンキー1号の所に・・・！（笑）

7 見えるの？

あたしは凶悪ヤンキー1号の家に行ってみることにした。

まあヤンキーって言っても元だけどね（笑）

今は優しいし、喧嘩は強いけど（笑）

彼の名前は『高城 実^{じゅんごう みの}』。

元ヤンキーである時には凶悪ヤンキーとも言われた男。

喧嘩が誰よりも強いけど無口で転入してきたせいかもしれない敬語。

実の前の学校は近かったから凶悪ヤンキーって事で隣の学校まで名は知られてた。

あたしも最初はすごく怖かったけど今は全く（笑）

あ、ここか。

あたしの目の前には立派な一軒家が建っていた。

「おっ邪魔しま〜す」とドアをすり抜けようとした瞬間、ガチャツと開いた。

「うわっ」

もちろん瑞樹には当たらない。

出てきたのは実。すぐに右へ曲がった。

右って事は・・・信之の家にも行くのかな。

どうしよう、行こうかな、うーん、行こう。↑はやっ

あたしは信之の家に先回りした。

信之の家はアパートだったので、階段を上らないといけない、が。

瑞樹は空中を飛んで3階にある信之の家にそのまますり抜けた。

「おわっ瑞樹？今までどこ行ってたんだよ」

「・・・お散歩」「はあ？」

「ねえ今から実が来るよ!」「知ってる、俺が呼んだ」
「なんで?」「暇だから」「・・・」

信之はいまだに実と仲がいいらしい。

ちよつと意外、他のみんなとは離れたくせに・・・
あつ口聞いてないだけか。

ピンポン

ガチャッ

「こんにちは」

実だ。さつきはドアに隠れてあんまり姿が見えなかったけど・・・
昔と変わらない、くせ毛も、顔も、声も。

「チャイム鳴らしたくせに勝手に入んなよ」

「待つのが面倒なので」「そんな待たせねーよ」

「信之くんなら待たせそうなので」「だから待たせねーって」

2人のやり取りも変わらない。

懐かしいな・・・。

「そこらへん適当に座つとけ、茶入れるから」

「どうも、ありがとうございます」

信之はキッチンに入っていた。

あたしもキッチンに入った

彩音の事を言つた方がいいと思って。

「ねえ信之、大変だよ!」「なんだ?」

「彩音が死ぬんだよ!」「は!?!」

「お父さんに殺されるよ!」

「落ち着けてどういうことだよ!」

あたしは信之に話した。

借金を背負ってる事、お母さんが出てった事、いまのお父さんの事。

「なるほどな」と言っけてキッチンを出ていき
お茶を持ち実がいる場所へと戻っていった。

「ねえ信之どうしよう!?!」

「そうですね、少し心配です」「だよな」

「僕も少し様子を見に行ってみたいです」

「でもちよつと行きにくいつて言うか・・・」

「それもそうですね」

さすが実だよ、信之とは大違い!

あれ・・・? 実、いま・・・

「あたしの事見えるの!?!」「え? 見えますよ、瑞樹さんでしょ?」
「靈感あるの!?!」「多少は」

信之以外にもあたしの事見える人がいたんだ！
すごいすごい！

「で、話戻すけど」「信之はなんでそんな冷静！？」「
明日、様子を見に行きましようか？」「明日！？」「
はい、明日です、何か問題でも？」「多ありだろ！」「
じゃあ明日決定」「お前もか！」

「じゃあ明日5時に公園で待ち合わせしましょう」
「5時！？」「
「夕方の5時です、昼間は小説を読みたいので」

「5時って・・・」「なにか問題でも？理由はちゃんとあるでしょ？」
「いや、あるけどもだな、実・・・」
「いいじゃん！もう5時で！決まり！」

少しめちゃくちゃになったけど・・・
まあいつか

7 見えるの？（後書き）

めちゃくちゃになっただけど気にせんで〜

8 待ち合わせ

彩音の様子を見に行く事になって、夕方の5時に待ち合わせと、言う事になったのだが・・・

「信之、もう5時前だよ！」

「んーわあってるって」

信之はお昼寝してました。
今は4時47分。

公園までは歩いて約10分。

「信之！」「あ？」

「3分で用意！」「できるか！」

「どうせ、遅刻だし、よくね？」

・・・それもそうか。

信之はのんびりと支度をしていた。

実に怒られても知らないよーとか言いながら

信之のベッドの上でコロコロ転がってるあたしって・・・
いま、何分だろーと時計と見てみたら

4時56分。

間違いなく遅刻だ。

「信之、まだ？」「あと5分」

・・・そんな時間ないって。

あたしこんなにのんびりやってていいのかな
いつ消えてもおかしくないんだよね・・・
もし、みんなと会う前に消えちゃったなら？
もし、なんにもできずに消えちゃったなら？

「瑞樹、行くぞ」

・・・あたしはあんたを待ってたんだよ
時計を見たら５時３分。
５分じゃないし。

あたしと信之は家を出て階段を下りた。

「なあ、お前さー」「なに？」

「生きてた時に好きな奴っていたの？」

「好きな奴？」

あたしは・・・いたっけな？

あたしはみんなといったらそれでよかったし・・・
そんな恋愛感情はなかったな。

「いなかったよ、でもかつこいいなとは思ってた人いるよ」

「ふーん、だれ？」「内緒」

「・・・おもしろくねーの」

数分歩いて公園が見えた。

足がないくせにとか言わないでね（笑）

夕方５時でも、少しだけだった人がいた。

でも、その中に実と言う人物はいない。

公園の時計を見たら5時15分。
言い出しつぺが遅刻ですか？

数分後――。

公園の時計を見た。

5時27分。

公園にいた人は、もうみんな帰っていった。

そこでようやく実が登場。

向こうの方からとぼとぼ歩いて来た。

「遅ーよ、何分待たせんだよ」

「いや、ここに来る途中、ケーキ屋さんでプリン売っていて
それがとても美味しそうに見えまして、行列ができていましたが
ついつい並んで買っちゃいました」

「・・・そーいやこいつ甘いもんが好きだっけ」

「みなさんの分も買いましたよ、彩音さんの分も」

「じゃあ、早く行きましょう」「・・・何か腹立つな」

あたしたちは公園を出た。

この時はまだ冬の季節に入ったばかりだったが
夕方という事もあり、当然体はすぐに冷えた。

「彩音の家^{うち}ってどこだ？」

「ああ、確か次の角を左だよ」

「そっいえば、最近彩音さん学校来てませんでしたよね」

「そうか？クラス離れたからわかんねーや」

「1週間くらい休んでますよ」「へーってかあいつ友達いんの？」

「僕が友達少ないんでいつも休み時間は彩音さんと・・・」

「ああ、お前のせいで友達いないのな」

少し実の顔が怖くなった。

あたしの知らない間にどんストーリーどん物語は進んでいたんだ。
実と信之は本当に仲がいいみたいだし。

「ねえねえ、実は好きな人いるの？」「はい？」

「急に話変えるな」(笑)「

・・・いますよ、1人」「えっ？」

「聞いた本人がびっくりしてんじゃんかよ(笑)」

だって、実にそんなイメージないってゆうか・・・
いつのまにそんなのできたんだ。すごいな。
ここで、あたしはある事に気付いた。

「彩音の家通り過ぎちゃった」

「は？」「本当はもつと向こう」

あたしの指のさした方向を2人は見た。

「げっすっげー前じゃんか」

ボソ「めんどくさっ」

「・・・実くん？今の言葉もう一回言ってみようか」

「めんどくさい」

「っていうか、実の敬語じゃないバージョン初めて聞いた」

「俺は何回か聞いた事あるな」「どんなの？」

「『黙れ』とか『うつぜ』とか『あ?』とか『しね』とか」

さすが元ヤンキーだな・・・

実から送られる視線がなぜか寒気に感じたのは黙っておこう。

8 待ち合わせ（後書き）

次から彩音出す！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4886w/>

あの日、あの時、あの場所で、、、

2012年1月4日02時48分発行